

芸術は人なり・朴栖甫画伯を偲ぶ

光州市立美術館名誉館長 河正雄

光州市立美術館分館河正雄美術館に於いて、朴栖甫(1931年－2023年)らを中心とする韓国モノトーン・モノクロ(無色)派の、河正雄コレクション展を開催されることとなった。

その展覧にあたり一文を要請された。「河正雄、もう少し気の利いたことを書けよ。」と亡き画伯から言われそうだと承知しつつ記す。

2023年、ソウルや光州、そして日本国内の美術関係者から、朴栖甫の訃報を知らされた。韓国を代表するコンテンポラリーアートの旗手、巨星墮つ思いであった。

80年代、東京で初めて開かれた韓日現代美術展を、尹鐸第3代韓国文化院長(在任1983年～1988年)より案内を受け、韓国側出品作家朴栖甫らを紹介された。

時を同じくして李禹煥からも電話があり、韓日現代作家の出品作品はもちろん、作家達との出会いにも好奇心があって軽い気持ちで出掛け、その際に朴栖甫個人が放つオーラとカリスマ性に圧倒された。エネルギーな眼の輝き、クラシックのテノール歌手が歌うように心地よく響く発声に魅了される出会いであった。

絵から放たれるエネルギー以前に、朴栖甫自身の個性から発散されるパワーとエネルギーに圧倒されたのが第一印象であった。

「展覧会が終わった」と朴栖甫から会って話をしたいと電話が入り会いに行った。そこで河鍾賢、尹明老、鄭永烈、崔明永を紹介された。

自身の作品と共に「旅費と滞在費等の経費としたいので出品作を買って欲しい。」といきなり頼まれ驚いたが、吸い込まれるように作品をコレクションすることとなった。

それまで60年代より、故郷の秋田県田沢湖畔に『祈りの美術館』計画で、在日作家らの作品をコレクションしており、韓国作家の作品も必要との判断からであった。

そのことが契機となり、ソウルから度々連絡が入り、今新しい作品を制作中であるから見て欲しいと言われた。

当時、李禹煥の作品もコレクションしており、光州の視覚障害者の為に、福祉会館建立の発起人となって足繫く韓国に通っていたので、訪問の際は必ず麻浦の洪益美術大学のアトリエを訪問、訪問の度毎に1点、また1点とコレクションすることとなった。

(内容は別紙を参照)

訪問の度、年毎に10～20%と値上げしていく絵の価格表を示した。同伴した妻は呼びつけた訪問客に対し、値を吊り上げる行為に不満を漏らしていたが、私は言うままにコレクションし続けた。

2012年光州市立美術館主催の河正雄コレクション『李禹煥展』開催の折、開幕式に朴栖甫は金昌烈、尹明老等と共に参席された。

一同が揃うレセプションの席で朴栖甫は「河正雄にはすまないことをしたが、彼は一切何も言わず私の言うままの価格で絵を買って行った。」と自慢げに話され、同席していた妻は、朴栖甫の良心に触れたと言ったので肩の荷を下ろした。

また1988年ソウルオリンピックの時、記念ポスターを制作したというので10枚下さった。私がサインを入れて欲しいと頼むと「ポスターにサインを入れて欲しいと頼んだのは君だけだ」と大変喜んでサインをしてくれた。

そのポスターを美術館に寄贈した際、ポスターは作品として受け入れられないと言われたが、「作品の完成形であるポスターも立派な作品である」と教えてやったと朴栖甫に話すと大変喜ばれ、私を見直したと言った。

2000年第3回光州ビエンナーレ開幕式での事である。朴栖甫は針生一郎が企画した記念展『芸術と人権』展鑑賞後に、光州市立美術館で記念展『在日の人権展』も鑑賞された。この企画は河正雄コレクションの在日作家作品を元に企画したもので私は展示企画員として働いた。

「ビエンナーレ本展の『芸術と人権』展も良かったが、河正雄の『在日の人権展』の方がビエンナーレ本展をも超える良い展示であった。」と褒め言葉を残して立ち去られた。滅多に人を褒めない人だと聞いていたので嬉しく思ったが、それ以上に在日の作家たちに光が当たった事が無性に嬉しかった。

2020年頃のこと、ソウルの朴栖甫から電話が入り、「果川の国立現代美術館で回顧展を開くので出席して欲しい。」と案内された。私はその数年前に心臓手術をし、更にコロナ禍も重なったことで韓国訪問は出来ないと欠礼を述べた。

後日、再度誘っていただいたが、体調を説明して欠席を述べたことが、今は行くべきであったと悔やまれ、惜しまれる。朴栖甫からの誘いはこの時が最初で最後であり、その一期一会を逃したことは一生の不徳であった。

40年の交際を振り返ると、優しく寛容、いつ会っても楽しく、懐かしい人である。常に新しいものを吸収しようとする意欲に溢れ、サービス精神旺盛、親分肌気質が皆から愛されていた。

いつも気さくにアトリエに案内され、作品の制作過程とコンセプトを熱く語りながら、描法を説明してくれた。無心に線を引き、筆を滑らせ、色を置いて表現を固定することを嫌う感性を現代的と感じた。現代美術の面白さは偶然性を各々の感性で観るところにあるのだ。

2000年代に入り、財団法人栖甫美術文化財団を設立したと、そのヴィジョンを熱く語った。そして自身の作品が次の世界を暗示させ教える、次はこうだと時代を強引に牽引する創作へのエネルギーと生気が満ち溢れていた。

シンプルなラインと黒の濃淡による影、そもそもそれが絵なのかと思う深い境地、無機質、幾何学的な図形の並びで構成された絵は、余人が及ばぬ未知の世界があると私は評価する。

ベストを尽くし、いい加減でも無頼でもなく、シニカルに流れない、緊張感ある舞

台空間に誘い込む演出力と構成力は職人の域とも言える。

80歳台に入っても、創作意欲に衰えを見せず、ユニークな仕掛けを以て、老いを喪失でなく新たな可能性へと模索する機会と捉える姿勢、個性の輝きと人間性そのものが朴栖甫芸術の真骨頂と見る。その芸術に祝福あれと冥福を祈る。